

---

# 真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

光秀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜平成の世から来た者〜

### 【Nコード】

N8479Z

### 【作者名】

光秀

### 【あらすじ】

平成の世から恋姫の世界へと降り立った一人の自衛官。この者が織り成す新たな外史の物語。

## タイムスリップ（前書き）

これからこの作品を連載させていただく『光秀』です。

確認はしておりますが多少の誤字・脱字等があるかもしれません。それも含め批判、感想、アドバイス等ありましたら言ってやってください。

目指すは完結！

これからこの作品を読んでいただく皆様と長く付き合っていけることを願います。

## タイムスリップ

俺は荒野の真ん中に一人立っていた。

まわりはまだ明るく少し暖かい。

東から吹く風が俺の長い髪をたなびかせる。

「此処何処だよ？」

思わずそんな声がこぼれる。

まさかこんな所にいるとは……。たしか俺はさっきまで教官に射撃の訓練を受けていたはずだったんだが。

おそらくというかまあ間違いなく此処は日本じゃないな。こんな地平線が日本にあるはずはないし。

俺は今の状況にかなり困惑していた。

「とりあえず歩くかな。人に会えればどうにかなるだろ」

そうやって俺は歩き出した。特にこれといった目的地もないまま……。

「なんだあれは？」

俺の百メートルぐらい先にはドラマで見るようなカツアゲのシーンが繰り広げられていた。

目を細めてみたところどうやら一人の女性が三人の男共に絡まれているようだった。

俺も普通の人間のためこんな状況を見ればほっておける筈がなかった。

「おい！お前ら」

「ああ！？」

急いでかけよった俺の目の前には左からチビ、長身、デブの順に黄色い服を着た男が立っている。この格好を見た俺はますますここが日本ではないと実感させられる。

おっと。こんな事を考えている場合じゃないんだ。

「死にてえのか！？ああ！？」

いかにも悪者ですと言わんばかりの罵声を俺に浴びせてくる。

シュツ！

「ぐふっ！！」

その声とともに長身の男は自らの腹を抱え、その場に蹲った。その様子を見たチビとデブはあまりの速さに何が起こったのか分かっていなかった。

なぜ長身が地面に蹲っているかというそれは俺がこいつの腹に正拳突きをくらわしたからだ。

俺も自衛官をやっている身なのでそのぐらいは造作も無かった。

一時期は十年に一度の逸材などともてはやされていたがそれは昔の事である。

「十数える間にこの場を立ち去れ。……いち！」

その掛け声とともにデブが長身を背負いチビと一緒に逃げていった。

そして俺は振り返り、さっきまで絡まれていた女性へと声を掛ける。

「大丈夫でしたか？」

「はい。助けていただき有難うございます」

その女性は俺より身長が少し低く、スラッとした印象を覚えた。髪や眉が白くそれに合わせたのか自らの格好も白い装束を身に纏っていた。

それにとっても整った顔立ちをしている。

「いえいえ。礼には及びませんよ。あつ、でも一つだけお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「はい。私ができることでしたら何でもお聞きください」

「じゃあ……此処は何処ですか？」

その質問をぶつけると女性は少し不思議そうにしていた。が、少しすると答えは返ってきた。

「此処は荊州南郡にあります枝江県です」

俺はその返答に少し眉をしかめた。

「少し待っていただけますか？」

「はい……」

俺は少し考えを纏める。

荊州だ？ということとは此処は中国か？いやしかしこの人が適当なことを言っているという事も。

…いやないな。

さっきの男どもやこの辺り一面に広がる荒野を目の前にして俺はその言葉が事実としか思えなかった。

そんな俺に一つの単語が思い浮かぶ。

## タイムスリップ

もうそう考えるしかこの状況に説明がつかなかった。

でも俺には何も変わった事は無かった。

俺にはこの不思議な状況に陥る前の記憶は鮮明に残っているがこれといってタイムスリップに繋がると思えるような出来事は一つも無かった。

そもそもタイムスリップってこんなに何の前触れもなくおとずれるものなのか。

「どうかなさいましたか？」

真剣な顔で真剣に悩んでいる俺を見かねたのか女性はそう一言声を掛けてくれた。

「いや。教えてくださり有難うございました」

そう言うと俺は踵を返しその女性の前から立ち去ろうとした。



「待ってください!」

俺は後ろを振り返る。

「何処か行く当てがおりですか?」

「いえ、特には」

俺はそう返事をする。

「もしよろしければ私の屋敷に泊りになりませんか?」

女性は淡々とした口調でそう言った。この申し出は俺にとっては願ったり叶ったりであった。が、俺はそれを断った。

「本当に気にしていただかないで結構ですから」

俺は軽く微笑みそう言う。だが彼女は納得していない様子だった。

「それでは私の気持ちが済まないんです!」

彼女は強い口調でそう言った。その彼女の剣幕と粘りに負けた俺は頷いた。

「それではご厚意に甘えさせていただきます」

俺は頭を下げた。

「頭を上げてください。本来ならこちらが頭を下げなければならぬのですから」

そう言うとな彼女は深く頭を下げた。

そして頭を上げた彼女は自らの名を名乗った。

だが俺はその名に驚きを隠せなかった。

「私の『馬良』と申します。真名は『魅音』（みおん）です。助けてくださった貴方にならこの名を預けます」

「!?!」

もしかして、

「馬良……………もしや字を『季常』というのではないだろうか？」

俺はおそろおそろ馬良と名乗る女性に尋ねた。もし俺の考えが正しいければこの女性はこの質問にイエスと答える筈だ。

そしてそれが意味するのは……

「はい。しかしなぜ私の字を？」

馬良と名乗る女性

見渡す限りの荒野

荊州南郡、枝江県

黄巾を纏った男共

タイムスリップ

多少の違いはあれどこのワードから導き出される答えは一つしかない。

「三国志……」

「えっ？」

此処は三国志の時代なんだ。

俺は表情にこそ出さなかったが確信を持ったその考えに驚いている。黄巾の男。これが黄巾党の奴らなら今は後漢末期ということになる。それに俺の目の前にいる女性、性別は違うが馬良と名乗っている。彼女が馬良ならば彼女の眉が白いのにも合点がいった。

「はあ」

頭をくしゃくしゃ搔きながら俺は溜息をついた。膨大な情報量に今にも頭がパンクしそうだった。

なぜ馬良が襄陽郡ではなく此処にいるのか、なぜ女あのか、などの疑問はまた今度考えることにした。

今考えても思考が追いつかない。

俺は一つ大きな深呼吸をして馬良に言った。

「すまなかった。色々考える事があったものでな。俺の名は『姜維』字は『伯約』だ。これからよろしく頼む」

俺はひとまずそう名乗った。ここが三国志の時代ならば俺の本名は不自然だと思ったからだ。

「あと教えてほしいのだが真名っていうのはなんなんだ？」

俺はこの真名というのに聞き覚えがなかった。

「不思議な事を言うのですね。真名っていうのは心を許した者にしか教えてはならない神聖な名。人によって価値観は違うと思います。が私はそのように認識しております」

この時代にはそんなものがあつたんだな。

馬良、いや『魅音』が俺に真名を預けたということはさっきの言葉通り俺に心を許したという事なのだろう。

「そうか。じゃあ俺も真名を預けるよ『政義』（まさよし）っていうんだ」

魅音は俺が真名を教えると少し驚いていた。

「真名を預けていただけるとは嬉しいです。これからよろしく願いますね」

「ああ」

俺は微笑み手を差し出す。すると魅音も微笑みながら俺の手を握り締める。

この時代にタイムスリップ？してどうなるか分からなかったがひと

まず、のたれ死ぬことは無さそうだ。

俺は安堵しつつ魅音の屋敷へと歩みを進めた。

## タイムスリップ（後書き）

「馬氏の五常白眉もつとも良し」といわれる通り馬良は優秀な馬五人兄弟のなかでも特に秀でていたと言われます。

最初なので次も近々更新したいと思っています。

天の御使いとして（前書き）

連日の更新となります。

今回もうまく書けているか不安です。



## 天の御使いとして

俺と魅音は帰路についていた。帰る当てなどない俺は厚意により魅音の屋敷に泊まらせてもらう事となっていた。

日も傾き始め、辺りもだんだん薄暗くなり始めていた。

「政義はなんでそんな格好をしていらっしゃるのですか？」

魅音は不意にそう言った。

「！？ええとだな……………」

俺は返答に困った。

魅音がそう言うのも無理は無い。俺は現在タイムスリップ直前に着用していた迷彩服を着ている。それはこの時代の者から見ればかなり異様であった。

そんな感じで俺が答えも出せないまましていると……

「もしかして天の御使いさまですか?!」

何かハツと思い出したかと思うとそれまで冷静沈着なイメージだった魅音とはうって変わり子供のように嬉しそうな顔でそう言った。本人は結構興奮気味である。

「天の御使い？」

「はい。今じゃ大陸はその噂で持ちきりですよ！なんでも管路なる占い師がこの地に乱世を終わらせる救世主が降り立って占ったのが始まりでしてね！」

その後もしばらく魅音は天の御使いについて熱く語っていた。

……天の御使いか……。

多少乱世を終わらせるなんていうハードルの高いものになってしま  
うがこの状況じゃ仕方無いだろう。嘘も方便っていうしな。

「魅音。実は俺天の御使いなんだ」

.....

あれ？もしかして嘘だつてばれたか？

しかしそんな俺の不安も杞憂で終わった。

「えっ！？本当？やっぱり！！そうだと思ってたんですよ」

俺はそんな魅音の返答に安堵の溜息をつく。

魅音はそわそわした様子で俺を見ていた。その眼はさっきまでのような眼では無く俺に対しての憧れがこもった眼だった。

まだ魅音の興奮はおさまらない。

「魅音。落ち着け」

俺がそう一言ささやくような小さな声で言つと魅音は顔を真っ赤にした。

「すみません。少し乱れてしまいました。私そついった興味のある事ですと興奮してしまつて」

冷静な口調へと戻つてはいたが髪をかまったり目が泳いでいるあたりを見るとまだ動揺しているように思えた。

そして魅音はひとつ大きく深呼吸をして言つた。

「それで興味ついでにもう一つお尋ねしたいんですけど?」

魅音は上目遣いで俺にそう言った。その顔を見た俺は思わず後ずさりしてしまう。

「えっええ。いいですよ」

「えつとですね。その腰についてる黒光りしている物はなんですか?」

そう言いながら魅音が指さした物は俺の腰についているホルスターに入っている拳銃だった。

「ああこれか?」

俺はホルスターから拳銃を抜くと撃つ構えをとる。

「これは拳銃といいまして、そうですね……天の世界の武器なんです」

「これが?」

魅音はさも不思議そうに拳銃を見つめている。

「どつやって使っんですか?」

魅音はまた目をキラキラさせ俺を見ている。

そうだな。天の御使いと証明するためにももったいないが一発打つとくか。

そして俺は再び拳銃を構える。

「魅音、耳塞いどいたほうがいいぞ」

「はい……」

魅音は両手で耳を塞いだ。

俺は目の前に広がる荒野へと引き金を引く。

バンッ！！

その銃声は一瞬のうちに消え去った。

「……………」

魅音は両手で耳を塞いだまま突っ立っていた。

まさか気絶したと言っなよ？

「おい魅音大丈夫か？」

俺は魅音の肩を揺すりながら言った。

「……凄いですね……あまりにも凄かったので言葉を失ってしまいました。しかしこれで貴方が天の御使いであると確信しました。申し訳ないことに正直さっきまでは半信半疑だったんです」

「いいですよ」

まあ拳銃を撃って見せたのもそのためなので信用してくれたのなら言う事無しだ。今思えばあながち天の世界から来た天の御使いっていうのも嘘っていう訳でもないしな。

「それよりまわりもだいぶ暗いですしさきを急ごうか？屋敷っていうのはもう少しなんでしょう？」

「ああ、はい。もう少しです」

そして俺たちは少し歩くスピードを速くした。

俺たちは街へとついた。魅音の話によるとここは江陵らしい。ということは太守は劉表か。

「どうぞ」

そうして俺が案内されたのは馬良の屋敷の一室だった。中は結構広く、おそらく十二畳くらいあるのではないだろうか？

「しばらくしたらお呼びしますので」

「有難う」

魅音は軽く微笑み会釈をすると部屋を出ていった。

その後寝台に腰を下ろした俺はしばらく馬良がなぜ女なのか、やタイムスリップの理由などを考えていたがろくな答えは浮かばなかった。

すると部屋に魅音がはいつてきた。

「政義さんに会わせたい人がいます」

そう一言だけ告げられた俺は魅音に案内されるがままについていった。

俺が案内されたのは城内にある玉座の間だった。そこには俺より身



長が高く水色の鎧を纏っている女性がいた。前髪はカチューシャのようなものであげてある。ちなみにそのカチューシャも水色だ。

周りには何人もの兵士が武装して立っていた。俺を警戒してのことだろう。

最初に口を開いたのはその水色の鎧を身に纏っている女性だった。

「あたしは江陵太守『劉表』だ。その変な奴、名乗れ」

俺を指さしながら劉表と名乗る女性は言った。

俺は目を疑った。まさか馬良だけでなく劉表までもが女性だとは。

だがまあそのことは一度保留にしておこう。

「俺の名は『姜維』字は『伯約』です」

俺は劉表の眼を見て言った。

「なかなか良い目をしてるじゃねえか！」

劉表は笑いながらそう言った。そして俺の目の前まで歩み寄ってくる。

そしてすぐに俺の横にいた魅音の方を向いてこう言った。

「こいつが魅音の言ってた天の御使いとやらか？」

「はい。『才燕』（さいえん）さま。この方がそうです」

そして劉表は俺を足の先から頭のとっぺんまで見終わると言った。

「採用！明日からあたしに仕えな！」

そして俺の肩をポンと叩くと部屋を出て行ってしまった。

俺は魅音の方を見て言った。

「どういうことだ？」

「実は政義に才燕さま、えっと劉表さまに仕えて欲しくてさっき進言してたんです。お節介でしたでしょうか？」

「いやそんな事は……」

さっき俺が部屋で待っている間に魅音は俺の代わりに就職活動をしてくれていたのか。

「よかったあ」

魅音は満面の笑みでそう言った。

そんなこんなで『天の御使い』という立場と『職』を手に入れた俺

はあまりにも出来すぎている事に内心驚いていた。

タイムスリップしてから僅か一日の出来事だったが正直まだこの時代の事もろくに分らないしかなり戸惑っている。

だが帰る方法が分からない以上はとりあえずこのままにいようと思っ  
っている。

そして自室へと戻りしばしの睡眠へとついた。

天の御使いとして（後書き）

変な言い回しや誤字・脱字等ありましたら言ってやっってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8479z/>

---

真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

2011年12月27日19時55分発行